

『十便良方』所載の鍼灸

上田 善信

日本鍼灸研究会

緒言 『十便良方』40巻(1196)は南宋の郭坦が撰じた医方書である。伝本に中国国家図書館所蔵の宋版『新編近時十便良方』(存巻11~17, 21~23)と、国立公文書館内閣文庫所蔵の影宋旧抄本『備全古今十便良方』(存巻1~12, 22~40)があるが、本文に違いは無い。ただ、宋版には慶元元年(1195)の汾陽博濟堂(博濟堂は著者・郭坦)の序があるが、影宋旧抄本には自序は無く、慶元元年(1195)の宋徳之序を附す。また宋版には「今具所編古今方論総目」があり66書目を挙げる。自序と宋徳之の序によれば、郭坦は汾陽(山西県汾陽)の人、名は坦、字は履道、方薬に精しく、病廃二十年、身を以て薬を試し、証により処方考究し、孫稽仲の方書『大衍』を拡充して本書を編纂した。自序では、本書の処方で使用する薬材が64種で貯蔵が簡単である等々、便なる理由を十条上げて、書題の由来を示唆している。検討には、『海外帰中医学善本古籍叢書(続)』第六冊所収本を使用した。

本書は、巻1~巻6は各薬物の解説と修治、巻7は炮炙論、巻8~巻33は風疾・傷寒・気疾・脾胃・虚損・痰飲・積熱・眼目・大小腸・婦人・小児などの病症と処方、巻34~巻40は脈訣・養生・丹薬・服食・酒治・食治・解毒などの雑方から成る。鍼灸条文は少ないが、引用書名を明示する。

鍼灸条文の記載 鍼灸条文は13条見られる。その内訳は巻10・治傷寒等疾諸方上4条・灸法(『普濟本事方』3条, 『蘇沈良方』1条), 巻11・治脾胃等疾諸方下2条・灸法(『千金要方』1条, 『外台秘要方』1条), 巻27・治小兒等疾諸方一1条・鍼法(『太平聖恵方』1条), 巻28・治小兒等疾諸方二1条・鍼烙法(引用書名不記1条), 巻31・治一切瘡腫諸方上4条・灸法(『千金要方』1条, 『千金翼方』1条, 『太平聖恵方』1条, 引用書名不記1条), 巻40・雑方1条・灸法(『太平聖恵方』1条)で、巻27の鍼法と巻28の鍼烙法以外の11条は灸法である。

巻28の引用書名不記1条は『太平聖恵方』の引用、巻31の泥灸法「若小覚背上痛痒有異、即取浄土、水和、捻作餅子、径一寸半、厚二分、貼着瘡上、以艾大作炷、灸之、一炷一易餅子。若粟米大時、可灸七餅子。若如榆莢大時、灸七七炷。若至錢許大時、日夜不住灸、并服鉄漿及五香連翹散。療之在速、則無不差也。聖恵方」の「聖恵方」は「千金要方」の誤記である。『蘇沈良方』を引く巻10・灸咳逆法は「子族中有霍乱吐痢垂困、忽発咳逆、半日之間逐至困殆、有一客云、有灸咳逆法、凡傷寒及久疾得咳逆、皆為惡候、投薬皆不効者、灸之必愈。予遂令灸之、火至肌、咳逆已定。其法、乳下一指許、正與乳相直骨間陷中、婦人即屈乳頭、度之乳頭齊処是穴、艾炷如小豆許、灸三壯。男灸左、女灸右。只一処、火到肌即差。若不差則多不救矣」とあるが、前半の治験は途中で省略されている。巻11に引く『千金要方』は「千金方療瘡又灸法。灸上星及大椎(大椎穴、在背從第一上節陷中、是也)至発時令滿百壯、艾炷如黍粒、俗人不解、取穴務大炷」と穴位を付加している。引用書の明示のあるものは、省略や付加を除けば忠実な引用である。

鍼灸の内容 灸法のうち、附子灸法、鼓灸法、泥灸法のような隔物灸が5条文、直接灸が6条文である。施灸壯数は、灸咳逆法の3壯以外は30壯~300壯の多壯で、灸一切瘡法では「每患一個瘡、或灸三百壯、或五百壯、或一千壯、二千壯、以知為度」とある。艾炷の形状は、如黍粒、小豆許、緑豆大、小棗大が見られる。小児の鍼法2条文は、重舌・重斷への鍼刺出血と無辜瘡に対する鍼烙法である。

結語 『十便良方』は南宋後期の成立であるが、灸法中心の隋唐鍼灸の傾向はなお顕著である。隔物灸の重用、鍼具の外科的使用はあるが、鍼法主体の金元鍼灸の萌芽はまだ見られない。